

## 本居宣長の『方劑歌』

—処方設計の知識表現—

吉川 澄美

東京都

本居宣長（1730–1801）の23歳から5年半の京都遊学中に書かれた『折肱録』は『傷寒論』から始まり民間薬など様々な処方ば抜書かれている。その中には「方劑歌」80首もあり、後に『方劑歌』54首として清書されている。それらの処方は袖珍本へ書出された『方彙簡卷』から選ばれている。五七調に乗せて薬味構成を覚えたと思われ、方劑の理解様式を知る手がかりにもなるので検討してみたい。以下の例は清書版『方劑歌』の表記を優先し、『折肱録』所収との相違は括弧内に示した。

- ① 参蘇（十蘇）：参蘇飲 二陳葛根 桔梗しそ（紫蘇）人参前胡 きこく（枳殼）木香
- ② 五天（五積）：三物に除湿かんきやう（乾姜）桔梗桂まわう（麻黄）白芷に きこく（枳殼）甘草
- ③ 真武：しんぶたう（真武湯）四逆伽苓に 芍薬ぞ（トシル）
- ④ 瀉青：しやせい丸（瀉青丸）たうき（当帰）山支子（梔子）屏風たて<sup>マリ</sup>鞠<sup>アツブ</sup>けて游京の將軍

方劑名は「参蘇（十蘇）」参蘇飲、「五天」五積散など後世方派の略称が使われ、「十蘇」は『濟世録』（配劑記録）で「十ソ」と転じ常用される。薬味構成は、参蘇飲①は「二陳（湯）」、五積散②は「三物（湯）」と「除湿（湯）」を含む事が詠み込まれている。『方彙簡卷』で「除湿」は「匿・金正」、さらに「金正」は「精・淡・皓・田・甘」，「平胃：加田為金正」（不換金正気散除藿香）なので結果的には、茯苓（匿）・蒼朮（精）・厚朴（淡）・陳皮（皓）・半夏（田）・甘草（甘）となり『普濟方』卷118の除湿湯（一方）から藿香を除いたものである。真武湯③は四逆湯（甘草・乾姜・附子）を含むとあるが『傷寒論』では生姜で、甘草も含まない。真武湯の周辺に四逆湯があるので混乱したか、或は意図的かもしれない。ちなみに『輔行訣臟腑用薬法要』（陶弘景撰）の小支武湯は生姜ではなく乾姜である。甘草の省略は他の歌にも複数ある。また「小柴胡」が詠み込まれた九味清脾湯（方彙簡卷・濟生方）は人参を含まない。これらの齟齬は薬味構成をモジュール的に包含関係として捉える事を優先し、構成単位を独自にルール化していた可能性を示唆する。内包部品の他例は「六君」「異功」「四物」「四苓」「平胃」「逍遙」等である。

ところで薬味の表記は④のように一字薬銘を埋込み、よみの自由度を生かしたものがある。下句の「鞠（川芎）蹴<sup>マリ</sup>て游（竜胆草）京（羌活）の將軍（大黄）」という情景には諧謔的な雰囲気があり、上句の「たうき（当帰）山支子（山梔子）」は「遠き山」と「山獅子」とで山が掛詞となっている。屏風（防風）を立て、山獅子を隔てたという状況から、獅子に喩えて恐れられた織田信長と対立した京の將軍、足利義昭との事を詠んだとするのは想像しすぎだろうか。瀉青丸（小兒薬証直訣）は肝火上炎に使われ、信長のイメージとも何とはなしに重なってくる。一字薬銘はさらに薬対として汎用される二味のペアにも使われ「伽苓」「帰芍」「参芪」のように一つの言葉、訓みとして固定配置される傾向がある。処方の包含関係にせよ、薬対にせよ記憶におけるチャック化であり、認知科学的にも合理的手法を取っている。例は省略するが音のリズム活用の歌も見られる。

歌が好きだった宣長は方劑も詠むことによって我がモノにしたと想像される。その目的は構成を記憶しそのまま使うためではない。宣長直筆の『諸疾目録回春病門次第』には「薬のつかひ処をよく吟味して覚ゆれば古方をとらずして一味配劑もなりよい也。況や古方をよく覚て加けんするをや」とあり、先人の立方様式を身につければ、患者毎に臨機応変にアレンジしやすいと考えていたのだろう。「一味配劑」とは既成方劑をそのまま使わずに、患者毎に薬味を組み立て処方設計する味岡三伯一門の流儀であり、宣長も少なからず実施した事は『濟世録』で確認できる。宣長にとって方劑歌は楽しんで覚えるだけでなく、合理的学習法としても役立っていたようだ。